

## 災害社会を生きた親鸞聖人

岐阜教区第15組 岩佐 善夫

2019年は、平成から令和へと改元された年。昭和生まれの私は、3つの元号を体験することになりました。

改元の話が踊る年、親鸞聖人が90年の生涯で、いくつの元号を体験されたかを調べてみました。調べて驚きました。なんと、38回も改元されているのです。内18回が、飢饉、大火、地震、水害などを理由とする災異改元であったとも解説されていました。

聖人は厳しい災害社会を生き抜いた方だったのです。9歳、得度の際に詠まれた「明日ありと思う心の仇桜、夜半に嵐の吹かぬものかは」19歳、磯長の聖徳太子廟に参籠された時の夢のお告げ「汝の命根は、正に十余歳なるべし」などの言葉が胸に迫ります。

さて、私たちも聖人と同じ様に、災害社会の現実を生きています。自然災害は猛威を振るい、甚大な被害をもたらしています。加えて凶悪な犯罪が多発し、政治の腐敗も次々に明るみに出て、不安な毎日を余儀なくされています。

だからこそ、今、聖人の言葉が、輝きを増しています。

聖人のお手紙に次のようなお言葉があります。

「ともの同朋にもねんごろのころのころのおわしましあわばこそ、世をいとうしるし」(P563)

同じ念仏者として、ねんごろのころを持つことが、信心のしるし、真宗門徒のしるしと呼びかけられています。また、「ねんごろ」の語源は「根の如く密に絡み合う」ということにあります。聖人は、私たちのいのちは周り方と根の如く絡み合い、共に弥陀に願われて生きる存在。このことに目を開こうと呼びかけておられます。ここに災害社会を生き抜く聖人の確信があると思う事です。

東北大震災にあわれた、福島市の方が読まれた歌が心に残っています。

「災いが この身に落ちて あの人の 痛みがわかる ことの愚かさ」

災害や苦しみを他人事にしてしまう私の姿が照らし出されたとき、ともの同朋として、手を取り合い、歩み出す道が開かれること、深い思いから教えられました。